

〔京都学園法学 1997年 第1号〕

## 《資料》

## 刑務所における「いじめ」

——イギリスの取り組み——

川 本 哲 郎

## 〔解説〕

ここに紹介するのは、イギリスの刑務所（Prison: 刑事・矯正施設を含む）における「いじめ」についてのブックレットである。我が国でも、最近、学校における「いじめ」の問題には大きな関心が寄せられ、その取り組みも活発になっている。その過程で、イギリスがスウェーデンと並ぶ「いじめ」の先進国として紹介されるようになった。

たしかに、イギリスは、世界に先駆けて「いじめ」の問題に取り組んできたが、学校だけでなく、いじめが発生する可能性のある他の領域へ関心を拡大してきた。そのひとつの例が、いじめと犯罪の関係や刑務所における「いじめ」である。前者については、一九九三年にケンブリッジ大学犯罪学研究所のファーリントン教授による詳細な研究が発表されている。<sup>(1)</sup> それによれば、(1) いじめと暴力犯罪の間には連続性がある、(2) いじめが強化されると犯罪に繋がることがあるので、いじめは加害者にも害を与えることになる、(3) いじめは犯罪よりも統制しやすい、(4) いじめの被害者が加害者に転じることがある、(5) いじめの加害者および被害者の子弟は将来同様の行動を行う傾向があることなどが指摘されている。

後者については、内務省が一九九三年にブックレットを発行し、各刑務所に「いじめ対策」の重要性を周知させることにした。<sup>(2)</sup>つまり、従来から各施設が、いじめの問題に取り組んできたが、それらの経験を普及させることによって、全国的ないじめ対策を提供することを目的として本書が公刊されたのである。その内容を章ごとに簡単に紹介すると、最初に、「問題の測定」において、実態調査と情報収集の重要性を指摘し、「施設の雰囲気の改善」では、刑務所全体のアプローチ (the 'whole prison' approach) を提唱し、職員、収容者、面会者が共同でこの問題に対処すべきであるとしている。「(いじめの) 監視と発見の改良」については、有線テレビの使用などの物理的環境の改善や情報収集の方法を提示しており、「被害者の支援」の項では、個々の収容者を担当する職員を配置する方法や、収容者による被害者のカウンセリング、被害者の訓練などが紹介されている。最後に「(いじめの) 加害者対策」を取り上げ、加害者のいじめの動機、加害者に対する懲罰について触れた後で、その処遇プログラムの例が示されている。

ここで紹介する「いじめ—刑務所全体の対応」は、この問題に早くから取り組んできたウェールズのカーディフ刑務所の処遇を紹介したものである。本書では、内務省のブックレットが、さらに敷衍されており、イギリスの刑務所における「いじめ対策」を概観するのに便宜であると思ひ、紹介することとした次第である。また、本書には、上述の論文に紹介されているような調査研究の成果が採り入れられているのも参考になると思われる。

周知のように、イギリスは刑務所の過剰拘禁や暴動などの問題を抱えており、現在でも刑務所の人口は増加を続け、重要な内政問題のひとつになっている。<sup>(3)</sup>近年、大きな暴動や脱走は起きていないし、刑務所の状況も改善されつつあるとはいえ、刑務所の状態が劣悪であることから、自殺・自傷の事件も数多く発生している。統計によれば、一九九六年の刑務所内の自殺は六四名を数えており、そのうち一四名が二一歳以下で、三六名が未決拘禁中の収容者である。<sup>(4)</sup>これに対して、日本の行刑施設事故発生件数を見ると、平成八年の自殺はわずか六件、職員の殺傷はゼロ、被収容者

の殺傷が五件となっている<sup>(5)</sup>。このように統計上からは、我が国の刑務所の状況はイギリスよりも格段優れているように見えるが、現在、学校のいじめが問題化していることを考えると、いじめは世界共通の事象であり、我が国の矯正施設では顕在化していない部分があるのではないかと危惧される<sup>(6)</sup>。本文にもあるように、いじめの問題を解決するとは、被害者を救うと同時に加害者を救済するという側面を有している。イギリスでは、拘禁処遇の問題と、学校などにおける「いじめ」の問題の深刻さに加えて、様々な調査研究が活発に実施されていることから<sup>(7)</sup>、このようなブレッツが誕生したと推測されるが、我が国の矯正処遇の改善という点でも、参考になるところは多いと思われる。また、学校における「いじめの先進国」イギリスの応用研究とでもいうべきものもあるので、現在関心を集めている学校のいじめの問題にも寄与するところであろう。ファーリントン教授も、前述の論文において、「犯罪学者がいじめについての調査結果から学ぶことがあるのと同様に、いじめの研究者も犯罪学の調査研究を考慮に入れることによって利益が得られるであろう」とした後に、その例として、犯罪の自己報告調査、犯罪歴という観点、攻撃と非行の予防についての調査研究を挙げておられるところである<sup>(8)</sup>。

本書の著者は、ウェールズ研究所大学 (University of Wales Institute Cardiff) の名誉上級講師 (Reader Emeritus) の Delwyn Tatum とカーディフ刑務所の主任刑務官 (Principal Officer) の Graham Herdman である。前者は、ウェールズ研究所大学教育運動学部職業開発センターの「いじめ対策室 (Countering Bullying Unit)<sup>(9)</sup>」室長を勤め、この分野におけるイギリスの権威の一人である。この対策室は、一九九四年三月に設立され、当初は学校におけるいじめ問題だけに焦点を当てていたが、最近では、刑務所と職場のいじめの問題にも取り組んでいる。

筆者は、一九九七年二月三日にカーディフ刑務所を訪問し、G. Herdman から「いじめ対策プログラム」の内容を説明していただき、施設内を参観する機会を得た。また、当日の午後には D. Tatum もカーディフ刑務所に来られ、

翻訳の許可を得る交渉を快諾していただいた。記して感謝したい。

D. Herdman からは、カーディフ刑務所が本書に準拠して作成したビデオを見せてもらいながら解説を受けたが、現在は、このプログラムは廃止されていた。イギリスの政策の転換の早さをここでも実感させられることになったが、その後の三月に訪問したランカスター青少年刑事施設では、同様のプログラムが実施されていたので、イギリス全体でこのような対策が廃止されたわけではない。また、これらの機会に実際の処遇を見て思ったのは、この対策が、刑務所における「いじめ」の問題だけでなく、拘禁処遇全般に及ぶものであるので、我が国にも参考になるところがあるということであった。とくに、信頼できる収容者によるカウンセリングは、いじめの被害者の援助になるばかりでなく、本人の更正にも役立つと思われるので、検討に値する制度であると思われる。

他方、一九九七年五月に起きた神戸の児童連続殺傷事件に関連して、少年の厳罰を要求する動きが一部に生じており、いじめに関しても、「いじめは明らかに犯罪行為であり、その処罰は本人のためである<sup>(10)</sup>」とする見解も見られるところである。たしかに、イギリスなどでは、前述のファーンリントン教授のような見解が散見されるし、本書も同様の立場をとっている。しかし、欧米における「いじめ」の問題を参照するときには、慎重な態度が必要であろう。たとえば、イギリスについては、人種や階級、失業、教育などの諸問題の分析が、この問題の背景として重要であると思われる。いじめは普遍的な問題であり、その対策が必要であることは言うまでもないが、外国の事情を参考とするためには、社会全体の分析を行った上で、我が国において有効と思われるものを採用すべきであろう。これは当然のことであるが、イギリスにおいて一九九三年に二人の一〇歳の少年が二歳一ヶ月の少年を殺害した事件<sup>(11)</sup>などが、神戸の事件の報道の中で参照されているのを見ると、安易な比較が行われているように思われるので、あえて、付言した次第である。そういう点からは、我が国の現在の状況では、いじめの問題に対処するときに、教師が、前述のよう

な見解があることを十分に承知しつつ、それを前面に押し出さないうで、いじめの加害者の処遇を考えるとというのが、妥当なのではなからうか。

いずれにしても、いじめの問題はかなりの広がりをも有するものであるもので、このようなイギリスにおける動向は、この問題を考える際のひとつの資料にすぎないということが確認されるべきであろう。

なお、本稿では、本書の一部を省略しているし、ブックレットでは様々なレイアウトの工夫が施されているが、便宜上、そのスタイルを変更していることをお断りしておきたい。

- (1) David P. Farrington, *Understanding and Preventing Bullying, Crime and Justice A Review of Research* Vol. 17, 1993, p. 381. なお、これ以降の最近の文献については、Anne Connell and David P. Farrington, *Bullying among incarcerated young offenders: developing an interview schedule and some preliminary results*, *Journal of Adolescence*, Vol. 19 (1996), pp. 75-93 を参照されたい。
- (2) HM Prison Service, *Bullying in Prison A strategy to beat it*, 1993. 本書の内容は、以下に紹介するカーディフ刑務所のブックレットと重複するところが多いので、必要と思われる箇所だけを註の中で取り上げることとする。
- (3) イギリスの刑事政策の動向については、拙稿「イギリスにおける刑事政策の動向について」*犯罪社会学研究*二二号一四九頁以下を参照されたい。
- (4) *The Times*, 8 January 1997. なお、守山正「イギリスにおける施設内自死の状況」*刑政*一〇七巻六号二八頁以下参照。
- (5) 平成九年版犯罪白書二五〇頁。
- (6) 中間敬夫「いじめ、犯罪の罪と罰」*罪と罰*三三巻三二頁以下参照。
- (7) イギリスとノルウェーの「いじめ」に関する研究は既に我が国に紹介されている。デルウィン・P・タツム、デヴィッド・A・レーン「いじめの発見と対策 イギリスの実践に学ぶ」(一九九六年)、イギリス教育省「いじめ」(一九九六年)、ピーター・K・スミス、ソニア・シャープ「いじめととりくんだ学校」英国における四年間にわたる実証的研究の成果と展

望」(一九九六年)、ダン・オルウェーズ「いじめ こうすれば防げる ノルウェーにおける成功例」(一九九五年)。オルウェーズ教授は、「いじめは、より一般的な、反社会的でルール違反の不健全な行動様式の一部と看することができるとされている。なお、スミス教授とオルウェーズ教授は一九九六年に来日して講演をされた(朝日新聞一九九六年七月二二日)。

(8) D. Farrington, op. cit., p. 383.

(9) この研究施設は「いじめ」だけを研究対象としている唯一の施設であり、出版以外にも様々な活動を積極的に展開している。連絡先は、Countering Bullying Unit Professional Development Centre University of Wales Institute Cardiff Cyncoed Road CARDIFF CF26XD Wales Tel: (01222) 551111 ext. 6781/6532 Fax: (01222) 506589 である。

(10) 小田晋「非行といじめの行動科学」(一九九七年)六六頁以下参照。

(11) この事件については、デービッド・ジェームズ・スミス「子どもを殺す子どもたち」(一九九七年)参照。この他にも、この事件を取り扱ったものとしては、David Jackson, Destroying the Baby in themselves, 1995, Blake Morrison, As if, 1997 がある。なお、イギリスの少年司法については、守山正「イギリス少年司法の行方―厳罰政策は続くか―」季刊社会安全二五号四頁以下参照。

## 「いじめ 刑務所全体の対応」

(“Bullying A Whole Prison Response” by Delwyn Tatum and Graham Herdman, 1995, Cardiff Institute of Higher Education)

- 一 はじめに
- 二 刑務所の現状

- 三 いじめを理解する
- 四 いじめの拡がり
- 五 いじめの質
- 六 暴力の循環
- 七 刑務所全体の対応
- 八 いじめ対策プログラム
- 九 勧告

## 一 はじめに

いじめが多くの集団の中で発生していることが次第に認識されるようになっていく。その問題の範囲、発生率および重大性についての関心が増大しているものの良い例が刑務所である。残念なことに刑務所で広く実行されているのは一種の残虐行為であり、しかも、国家レベルでも地方レベルでも矯正局の関心をほとんど引いていない。それにもかかわらず、刑務所の職員は、いじめが広範囲にわたって繰り返されていることを認めるであろう。

いじめは、小さなものから暴行や虐待、強要という重大な行為にまで及んでおり、自傷行為や自殺、殺人に至る場合もある。被害者は肉体的、感情的、心理的虐待を受けている。いじめは、刑務所社会のもっとも傷つきやすい人たちに向けられる。その中には、人種や社会階層、性的志向、身体的ないしは精神的障害のために（他の者と）異なっていると思われる人たちが含まれる。

### ・ いじめに対する認識の増大

いじめは、学校、刑務所、軍隊、職場、家庭、病院などで生じる。

なぜ、いじめがこれまで深刻に考えられてこなかったのかということは理解しがたい。刑務所の生活では unavoidable なものと考えられていたからであろうか。それとも、秘密裏に行われるので、刑務所の職員の警戒をくぐり抜けるのであろうか。あるいは、たぶん、収容者はこのように生じる全ての刑罰に値すると信じているために、いじめを無視する職員も中には存在するということなのであろうか。

刑務所の職員もいじめを行うことがあるし、この問題に向けられるプログラムは、本質的に、職員や施設自体によって示される、承認できない態度や実務を問題にしなければならない。いじめは、いじめる者といじめられる者の双方に影響を与えるだけでなく、それについて証言する可能性のある他の収容者や、暴力・攻撃について沈黙を守る他の収容者に影響を与えるし、さらに、被害者の苦痛にも影響を与えるのである。ある者を威嚇し圧迫すると、他の者を恐れさせることになるからである。いじめを放置すれば、職員の権威を損ない、棟や刑務所の雰囲気害することになる。

収容者には権利がある。拘禁されていれば、正義と恐怖からの自由という基本的人權の賦与を放棄することにはならないのである。また、矯正局には、安全な施設を作るだけでなく、すべての収容者に安全な環境を与える責任がある。

## 二 刑務所の現状

一九九二年以降、カーディフ刑務所の少年拘置所は、いじめに対する刑務所全体の対応策を発展させてきた。二年間の成果はきわめて有望なものであり、拘置所の収容者全員を変えることによって、事件の発生を減少させるために我々が何かをすることが出来るということが判明した。つまり、重大な自殺未遂は、一九九二年に二三件も発生した



が、(このプログラムが導入された) 一九九三年には六件、一九九四年には八件に減少しているし、自傷行為も、一九九二年から一九九三年にかけて九〇%減少し、一九九三年から一九九四年には八〇%減少した。

(一) いじめは、すべての刑務所で生じる。

このことは自明のように思われるかもしれないが、その目的は以下のことを伝達することにある。つまり、いじめが受け入れられないということと、それへの対処を明言する政策を伴う「いじめ対策計画」をすべての刑務所が備える必要があるということである。

(二) いじめは他の反社会的態度と関連を有する。

概して、いじめを行う者は、窃盗や(落書きを含む)破壊活動、ゆすり(bullying)、みかじめ料の請求(taxing)\*、反抗などの他の犯罪的態度をとる。このことは、被害者に、自殺や自傷、恐怖と失望のうちに生活するなどの重大な結果をもたらすことがある。したがって、いじめに対処する場合に、刑務所は、また、他の反社会的態度に目を向け、そして、その発生をも減少させることになる。いじめ対策計画は、刑務所の秩序と規律に対する総合的アプローチの一部と見なされるべきである。

(三) いじめは規律と秩序を乱す。

収容者が、他者の権利を脅かしたり侵害したりするのが許されるとしたら、彼らは、刑務官の無為を、いじめを気にしていないとか、さらには容認していると解釈することになる。いじめは、個人に損害を与え、刑務所が担当している者を保護する能力に疑問を抱かせることになる。

「いじめは誰もが知っている秘密(known secret)である」

\* 刑務所内の俗語については、Angela Devlin, *Prison Patter* A Dictionary of Prison Words and Slang, 1996. 参照。

### 三 いじめを理解する

#### ・ いじめとは何か

いじめとは複雑なパターンの対人行動であり、その発生に取り組んで減少させなければ、第一に、いじめがどういうことを理解しなければならない。あまりにも単純な見解は、解決もまた単純であると思うことにつながるのである。

#### ・ 定義

いじめとは、他人を傷つけて、その者にストレスを与えたいという意図的かつ意識的、継続的な欲求のことである。

\*この他に、「他人を傷つけたり、脅したり、おびえさせたいという欲求に動機づけられた行為」(HM Prison Service)や、「力のある者による、力のない者に対する反復的圧迫」(Farrington, 1996)などの定義がある。

#### ・ いじめ

定義の前半はいじめに焦点を当て、後半は被害者に焦点を当てている。

いじめは、「力」に関するものである。つまり、他人を支配し、彼に自分のしたいようにさせる能力である。それは、知ったうえで行われるし、計画的である。たまたま偶然に行われるものではない。たいていのいじめの場合の重要な要因は、その継続性である。それは拡大し、被害者にとって重大な結果をもたらす。いじめを行う者は、のしりや攻撃、暴力によって(相手を)自分の思い通りにできることを学習する。いじめは、社会生活上、家庭や学校、社会において学習される。刑務所は、いじめの行動が真摯に取り上げられ、他人との交際の別の方法が提示される最初の機会であるかもしれない。学習されることは、学習しないこともできるからである。

「いじめ…それは素質か環境か？」

・被害者

いじめは、被害者が恐怖と脅威を感じるほどのものである必要はない。被害者は、ベッドに寝ていたり、食事をしていたり、ラジオを聴いていたりするかもしれない。ストレスを引き起こすのは、これから起きることに対する現在の恐怖である。ストレスの効果は被害者を衰弱させ、結果が広範囲にわたることがある。それによって、明晰に考えたり、集中したり、自己の日常行動を組織したりする能力が減退する。そのために、爆発的な行動をとったり、食欲が減退したり、規則的な睡眠がとれないということが起こりうる。刑務所のような閉鎖的な社会では、その結果は、自分の感じているプレッシャーから逃れる方法を被害者が求めていくときに、悲惨なものになることがある。

「戦うか逃げるか」しか選択できないときは、収容者は、唯一の逃げ道は自殺か自傷であると思うようになる可能性がある。

・ステレオタイプに気づくこと。

典型的ないじめは存在するか。

調査研究では、典型的ないじめっ子や被害者のモデルは提供されていない。

通常、いじめを行う者は、被害者よりも大きくて、力が強い。そして、衝動的で、他人を支配したいという強力な欲望をもっているのが特徴である。彼らは、一般的な反社会的、規則違反行動と結びつき、両親や教師、同僚などに対して攻撃的であることがよくある。

彼らは、概して、暴力の使用に対して肯定的な態度をとり、内的な攻撃（衝動）に突き動かされている。彼らは、社会の他の構成員のように、虐待や攻撃を制限する社会的慣習によって抑制されない。さらに、彼らは被害者に対し

てほとんど同情や共感をもたない。

典型的な被害者というのは存在するか。

一般的に信じられているのとは逆に、被害者は、他の人と大幅に異なっているとは限らない。眼鏡をかけて、太っていたり、髪の毛が赤いことなどが、自動的にいじめを招くわけではない。被害者が、他の収容者よりも心配症だということとはありうる。注意深くて内向的ということもよくある。中には、孤立し、同僚の中で自己主張するのが困難な者もいる。

自分を失敗者で魅力がないと思っている者が多い。彼らは、自分が他人とは違っているので恥ずかしいと思うことがあるし、いじめが続けば、自分は狙われるに値すると思うようになるかもしれない。

『原因と結果』を峻別するのは難しいことがよくあるので、上記のことを当てはめる際には注意が必要である。」

・いじめの理由としては、力と支配、欲望 (greed)、苦情 (grievance)、個人的満足、社会的地位が挙げられる。

これらの理由は、いじめが彼らの役割と評判に深く関わっていることを示している。したがって、職員たちが、その行動を変えるのにはかなりの努力が必要とされるだろう。刑務所のアプローチが、個々の職員の調整されていない活動に依拠し、ゆきあたりばったりで組織だったものでない場合は、これは実現しないであろう。成功のためには、いじめ対策のプログラムは以下のことを必要とする。

計画的であること      できるだけ多くの人を計画に参加させ、考えを共有し、成功に向けての関わりを維持することによる。

意思の疎通があること      彼らにプログラムを理解させ、その支持を得るために、すべての職員、収容者、家族、

面会者との（意志の疎通を図る）。

公式のものにすること　規律についての施設の政策声明において（公式のものにし）、そして、従うべき手続を定めること。

持続すること　年間を通して、そして以降も（持続すること）。継続しなければならないし、一回限りのものであることはならない。

#### 四　いじめの拡がり

いじめは全ての刑務所で発生しているが、すべての収容者が、いじめの加害者ないしは被害者として、あるいは、加害者と被害者の両方の役割を演じて、いじめに関わっている、ということではない。

以下のデータは、一九九二年の Beck の研究からの引用である。彼が、Feltham 青少年刑事施設において心理学者として勤務していたときの調査であるが、前月に発生した事件について、二五〇人の収容者に質問したところ、次のような結果が得られた。

「この施設で何回いじめられたか」という質問に対して、ほぼ三〇%がいじめられたと回答した。「この施設で何回いじめたことがあるか」については、二一%がいじめたと回答した。

この数字が例外であって、他の施設と異なるものである、ということを示唆するものは何もない。

職員の反応について、職員が何回いじめを止めようとしたかという質問に対しては、半数が「知らなかった」と答え、一七%が「ほとんどなかった」と回答した。半数以上が「いじめ」について職員には言わなかったと述べているように、このような否定的な見方は、いじめを受けた者の三〇%によって確認されている。

・時と場所

いじめの拡がりを知ることに加えて、刑務所は、この問題に対処したいのであれば、いじめの起きる場所と時を知る必要がある。収容者の集合する場所は、すべていじめの起きやすい場所 (hot-spot) であり、職員の目の届かない所では特にその可能性が高い。

以下の場所がたいていの刑務所に当てはまる。

談話室 (association area)、新人の受付、廊下、階段、体育館と更衣室、シャワールームと便所、研修室、居室。

これらの場所は、頻繁に時間を決めずに巡回して監視する必要がある。

・いじめの指標

調査以外に、いじめの発生の増加を発見するために多くの間接的な指標を用いることができる。

つまり、暴行、傷害、脱走及び逃走、帰休から戻って来ないこと、規則四三条の請求<sup>\*</sup>、隔離を求めての規則違反、移送の要求、自傷及び病気の訴え、(施設の) 条件や他の収容者についての苦情、買う物が無いのにもかかわらず売店を訪れること (などである)。

出典：「刑務所におけるいじめ」矯正局 (一九九三年)

<sup>\*</sup> 刑務所規則四三条は、他の収容者から危害を受けるおそれのある収容者が、自己の保護を求め、隔離収容を請求することを認めている。

五 いじめの質

ひとつの形態にとどまらず、いじめは様々な形態をとる。行動を非常に複雑にしているのは、様々な形態の間の内

部的相互関係である。以下に掲げる六つのカテゴリーは、合わせて、いじめの加害者と被害者の相互作用の複雑さを示している。

## カテゴリー 形態

一 非言語 青年男性のしぐさなどは侮辱や威嚇になることがある。ジェスチャーは人種的かつ性的あてつけ (innuendoes) になることがある。

二 言語 言葉によるいじめは感情を傷つけることがある。これには、罵倒、ののしり、脅迫、人種差別、性的いいがかりなどがある。

三 身体的 身体的いじめには、殴打から危険な武器を用いる暴行に至るまでの拡がりがある。性的な暴行も含まれる。

四 強要 これには、所持品を渡させることや、帰休や面会の時に貴重品や薬物、たばこを持つてこさせることが含まれる。常に、ゆすりやみかじめ料の請求は (物品の) 貸与とその後の利子付きの返済とつながっている。

五 排除 拘禁は収容者を親密な交際から切り離す。棟内での排除は、さらに、収容者の動きと交際を孤立化させ、刑務所が与える特典を得るのを制限することがある。それは、権利の否定である。規則四三条による隔離は、たとえそれが、請求されたものであっても、(権利を) 剝奪する行為である。

六 悪評を広めること 収容者は、家族や友人の支援体制を奪われているので、妻や恋人に対する悪評や、息子や娘の身に生じることについて、非常に傷つきやすくなっている。

その性質上、いじめは破壊的 (destructive) である。いじめは被害者にとって有害であり、また、加害者にとって

も有害である。というのは、いじめの継続は、虐待や攻撃、暴力に対する彼らの現在の態度を強化するからである。いじめは、職員の権威と地位を損なう。職員には、収容者の介護や監督ができないということになりかねないからである。そして、犯罪者の副次文化を助長し、刑務所内に、職員が立入ることのできない区域ができれば、施設の統治を乱すことになる。

## 六 暴力の循環

### ・いじめの根源

いじめの行動は、家庭と社会全般の不適切なモデルによって、社会的に学習され強化される。虐待する両親と住むことによって、子供は、攻撃と暴力が、他人を支配し、思い通りにするのに、適切で効果的な手段であることを学習する。いじめの加害者の両親は、厳しい仕置きをしたり、威嚇的な感情の爆発を起こす可能性がきわめて高い。青少年が、たとえ自分は虐待されていなくても、親が配偶者や家族の他の一員を虐待するのを見ているかもしれない。攻撃的な態度は親から子供に受け継がれ、サイクルが続くことになる。

不幸にも、攻撃的な態度は、他人に対していじめの態度を示す他者によって、さらに強化されることがある。たとえば、被疑者を扱うときに、官憲が不適切なモデルを提示すれば、テレビやビデオで見られることがあるかもしれない。攻撃には配当がつくという考えは、友人の面前で生徒を懲らしめるために、言葉で虐待し、あざけり、皮肉を言うって、その結果、生徒に恥をかかせ、軽視するような教師によって、さらに強化されるかもしれない。

同様に、刑務所の職員が収容者の処遇において虐待や攻撃態度に訴えるならば、彼らもまた、いじめは社会的に容認され、個人的には楽しいものであるという収容者の態度を強化することに貢献することになる。



## ・調査研究の指標

アメリカやノルウェー、イギリスの調査研究は、青年男子のかなりの割合（二五％）が累犯の犯罪者になることを示している。彼らは、社会にとって脅威となる暴力的犯罪者であり、妻や子供に対して家庭内暴力をふるうようになる。そのことは、前節で述べた暴力的成人のモデルとなっている青年男子の次の世代を生むことになる。

「いじめは、後の攻撃的犯罪と犯罪的行動の予兆とみなされるべきである。」

### その他の共通の背景的要因

最終的には刑務所に入ることになる「いじめの加害者」は、混乱し、感情的に不安定な家庭生活から生み出される。彼らは、学校でほとんど何も達成せず、授業を混乱させ、無断欠席をし、早い段階で軽微な犯罪を犯し、暴力をふるう。攻撃的な子供は、大きくなって暴力的な親と国民になる。暴力的態度のこの循環を断ち切るためには、可能な場合と場所では常に介入しなければならない。

### ・早期の介入

一 早期の介入には、学校と刑務所において育児のコースを導入することによって、家庭の育児を変えることが含まれる。

二 早期の介入は、小学校の段階で実施されることが必要である。校庭のいじめが、暴力モデルの循環が示しているように、暴力的な態度から生じると仮定されてはならない。教師は、徴候を認識し、いじめの行動を変えるために介入しなければならない。ジェームズ・バルガーの殺人事件において、二人の一〇歳の少年は、この節で述べたようないじめを含む多くの背景的かつ行動的要因を示していた。

\* 二人の少年がショッピングセンターから二歳の子どもを連れ出して、後に殺害したという事件で、イギリス社会に大きな

衝撃を与えた。詳しくは、デービッド・ジェームズ・スミス「子どもを殺す子どもたち」（一九九七年）を参照されたい。

三 早期の介入とは、青少年に責任を持つ人たちが、そのような行動が観察されたり報告されたりするとすぐに活動を開始することである。こういうわけで、すべての学校と刑務所、特に青少年刑事施設は、このような破壊的態度を防止するための介入計画を慎重に作成しなければならないのである。

「暴力的な子供―暴力的な大人」

## 七 刑務所全体の対応\*

・はじめに

本節は、カーデイフの青少年拘置施設で開始され発展してきた「いじめ対策プログラム」を取り上げる。プログラムは一九九二年に考案された。その当時は、全ての階級の多くの職員が、現在の状況は承認できないと思っていたのである。非常に多くの自殺未遂と自傷があったし、それは、収容者の憂鬱と絶望の明白な指標であり、いじめは、その主要な要因とされていたのである。いじめが、拘禁中の青少年収容者の死亡に関連していることは一般に認められていたし、同様に、すべての刑務所において取り組む必要がある重要な問題であることも認識されていた。

一九九一年には、刑務所内で二九六三件の自殺未遂と自傷が記録されている。これらの四〇%以上が二一歳以下の青年のものであった。これらの公的統計は、刑務所の主席監察官であるテューミン判事の見解―「非常に多くの自傷の実例は恣意的にうわべだけの行為 (gesture) と判断されている」(一九九二年報告)―を見れば、おそらく実態より少ない数字であろう。

この見解は、リーブリング (A. Liebling, *Suicides in Prisons*, 1992) にも支持されている。彼女は、刑務所における青少年の自殺を調査した後で、大半の自殺未遂と自傷は、「精神障害ではなく、動揺する (disturbed) 青年期や家族の支援の欠如、教育の問題、社交・人間関係の技術の未熟なことに関連する対処 (coping) の問題」が原因であると結論づけている。

これらの見解を見れば、いじめに対する職員の認識と社会教育的プログラムの質と方向を見直す必要があるのは明白である。

\* 刑務所全体の対応というアプローチは、学校の「いじめ対策」において用いられている方法である。これは、いじめ対策を考案し、それを公表して、全ての者―職員、収容者、面会者に理解させることをいう。対策は、いじめの重大性を認識させ、たうえで、いじめを容認せず、全ての事件を調査して、いじめに厳格に対処すると同時に、被害者を援助することを骨子とする。(Prison Service, op. cit., p. 8)

#### ・ 刑務所人口の変化

青少年は、他の年代層よりも高い犯罪率を示しており、有罪判決や正式の警告に至る犯罪のほぼ半数を占めている。この年代層の憂慮すべき傾向というのは、青少年犯罪者が次第に若年化しており、重大な暴力的犯罪に関与する率が高くなっているということである。

この傾向は、結果として青少年刑事施設における一五、一六歳の数が増加しているので、矯正局にとって、多くのことを示唆している。これらの青少年は、一部には年齢のために、また、大多数が初めて刑務所の生活を経験することになるので、あらゆる形態のいじめに特に傷つきやすいのである。

この低年齢傾向は、カーデイフでも明らかである。一九九四年の十一月には、一七歳以下が増加し、二五%を占めた。さらに憂慮すべきことに、約一二%は一五歳か一六歳であった。

この傾向に対処するために、いじめの予防策の一部として、棟に青少年房を導入した。そこでは、犯罪者は、共犯かあるいは年長の信頼できる収容者と一緒にされる。

#### ・ 予防のための危機管理

いじめを減少させたいのであれば、一連の戦略を採用する必要があることは、カーデイフの青少年刑事施設・拘置所において採用された「いじめに対する刑務所全体の対応」の発展の中で早い時期に認められていた。いじめは、収容者の思考と態度の中に深く根づいているので、職員は、問題に対する徹底した一貫性のある取り組みが様々な方向から繰り返されなければならない、と思っていた。最初に、職員自身が政策とその実行に専念する必要があった。さらに、職員は、いじめの複雑な性質と全ての関係者に与える悲劇的な効果を理解しなければならない。

いったん計画されると、プログラムはすべての収容者に伝達される必要があったし、D棟も拘置所であったので、収容者の新しい集団は、刑務所のいじめ対策の基本的な部分と居室での運用を十分に知る必要があった。ある点では、プログラムの毎週、毎日の反覆が職員の関与と収容者の認識を強化した。

『いじめ…刑務所全体の対応』モデルで述べられたように、プログラムは、危機管理から、介入、そして最終的には予防策へと進行する。』

#### ・ 危機管理

職員がどんなに熱心に義務を遂行しても、迅速に処理しなければならない危機的な事件は常に発生する。その性質上、危機管理は、反作用的（事後的）反応（reactive response）であり、危機の発生を待って、対応する行動が開始

される。用いられる戦略の中には、被害者自身を保護のために隔離することや、加害者の攻撃的態度や行動に取り組む、さらにそれを変えることを目的とした加害者の隔離のように、個々の事件を処理するものがある。

いじめ

### 危機管理

### 介入策

### 予防プログラム

- |                    |                 |                   |
|--------------------|-----------------|-------------------|
| 一 被害者の隔離（規則四三条）    | 一 ヘルプライン        | 一 いじめ対策の政策および手続   |
| 二 一四日間の「いじめ対策プログラム | 二 聴取            | 二 導入プログラム         |
| グラム                | 三 居室外の時間の増加     | 三 担当職員計画          |
| 三 医療センターへの移送       | 四 教育プログラム       | 四 十分な（diligent）監督 |
| 四 カウンセリング―自殺・自傷    | 五 レクリエーション      | 五 信頼の雰囲気          |
| の後の                | 六 有意義な作業体験      |                   |
|                    | 七 家族や友人との接触の増加。 |                   |

電話、面会の増加。

### ・介入策

介入策は、いじめに対する予防的（事前的）対応（proactive response）へとプログラムを進行させる。危機管理とは異なり、戦略は、さらに先を見越したものであり、したがって、問題が危機になるのを予防しようとするものである。その目的は、たいてい、社会的かつ教育的であり、収容者を建設的に支配する（occupy）のを狙いとするので、彼らは、自分の状況とそれに続くストレスを誘発する状態から離れられることになる。

「聴取」(Listener Scheme)<sup>\*</sup>は、多くの刑務所で実施されており、その場合は、信頼される収容者が、訓練を受けて、他の収容者に助言とカウンセリングを行う。いじめやそれに関連する諸問題には秘密という強力な掟があるので、収容者は職員よりも仲間の収容者に話すのを好む。また、収容者が「いわゆる」同僚を密告するとしたら、報復の恐怖も存在する。「聴取」は、収容者が収容者を援助する良い手本でもある。

\* いじめは、Swansea 刑務所において、自殺と自傷事件の減少を目的として始められたものである。収容者のボランティアによって立案され、運営される点に特徴がある。聞き手は、分別のある収容者で、全ての区画に配置される。サマリタンの地方支部の指導によって、カウンセリングの訓練を受ける。被害者の援助と同時に、聞き手の収容者の自己評価が高まるなどの利点があるとされている (Prison Service, op. cit., p. 15)。

カーディフ刑務所を参観したときに聞いたところでは、リスナーは八名で、そのうち、五人が訓練(週一回二時間の研修を五回)を受けていて、リスナーであることを示すバッジを付けているとのことであった。

ヘルプラインとは、収容者が、いじめの性質と、いつどこで起きるか、そして誰が関与しているかを簡単に述べて、いじめの事件を信頼できる職員に伝えるためのメモを投函できる公式の投書箱のことである。収容者は、自分が特定されず、職員が情報に基づいて行動することを確信する。ここでも、これは、収容者が、所内での生活を向上させるために何かを積極的に行うというひとつの例である。導入(induction)プログラムの間、収容者は、これが密告ではなくて、自己防衛であることを確信する。

ヘルプラインは、多くの者が禁じられていると思う情報提供という極めて個人的で直接的な(face-to-face)行為を克服する方法である。棟は毎週一〇通もの手紙を受け取り、いたずらの手紙や悪意を伴うと認められたものはごく少数しかなかった。非常に重要なことであるが、懲罰行為が収容者に対して行われる前に、すべての告発が調査されて

いる。

#### ・予防プログラム

いじめに対する刑務所の対応のこの段階での目的は、所内に人道的で信頼できる雰囲気を生み出すことである。予防的アプローチは、いじめが起きる可能性の最も高い刑務所生活の場面を予測し、その重大さと結果を軽減するため建設的な戦略を導入することを狙いとしているのであるから、もっとも予防的な（proactive）ものである。

このアプローチの中心は、いじめは決して容認されないという明確な宣言と、いじめの事件を取り扱う際の職員に助言と指導を与える一連の公式の手續である。いじめに対する職員の態度や、疑惑がある場合の調査の方法、そして、その後の事件処理の方法には一貫性がなければならない。職員は、協働して、棟を管理・運営していると見られなければならない。結局、体制は、刑務所の内外において、収容者が自己の犯罪的行動に取り組むのを助けることを狙いとした積極的な対応であると見なされなければならないのである。

#### ・導入プログラム

このプログラムは、刑務所全体のアプローチの中心的要素である。<sup>\*</sup>それは、刑務所に入ることについての日課と期待されること及び潜在的危険を個々の新入の収容者に知らせることを狙いとしているからである。多くの者にとっては、拘禁されることは初めての経験であり、再犯者にとっては、実施されている新しい「いじめ対策」の体制を知らせる機会である。実際に、その後のいじめに取り組む活動が成功するかどうかは、導入期間が個々の新入収容者に与える影響によって大きく左右されるのである。

<sup>\*</sup> 入所の時点に、収容者が、いじめの加害者や被害者にならないように援助されることの重要性は夙に認識されており、他の施設でも、新入の収容者に対して教育が実施されている。その内容は、いじめの性質と効果、加害者の特定およびその動

機理解、いじめのない環境の利点、問題を解決するためにできることなどを導入プログラムにおいて収容者に考えさせ、いじめが起きたときは、職員に連絡することを奨励するというものである。(Prison Service, op. cit., p. 9)

どの刑務所でも採用できるのは、融通が利き、順序を替えられる(rolling)プログラムである。それは、五日間に渡り、新入の収容者が二四時間拘禁される危険に対して警戒を怠らないように彼らを統合する(integrate)ことを狙いとしている。カーディフ青少年刑事施設のような拘置所では、プログラムは、頻繁に入れ替わる収容者の要求を満たすことができない。したがって、「一日目 導入・拘禁に対する対処」の後は、残りのテーマは、どのような順序でも取り扱うことができる。つまり、新入の収容者は、プログラムに他の収容者と一緒に参加できし、したがって、薬物や酒、保健衛生、いじめについての指導を継続して受けられるのである。

#### 一日目

刑務所に到着すると、多くの収容者は、混乱し、不安を抱き、恐怖を感じる。彼らは、ひどい噂を聞いていた、見知らぬ恐ろしい世界に入っていくのである。導入の日の目的は、彼らの不安の多くを和らげ、彼らを所内の日常生活に入っていくさせることである。

導入週間の間、(新入の)収容者は、他人を利用するような収容者から遠ざけるために、導入区画(induction landing)に収容される。<sup>\*</sup>(一五歳から一六歳の)少年は、積極的な助言と援助を与えられるような同輩ないしは年輩の収容者と一緒に置かれることによって、入所の体験を受け入れられるように援助を受ける。

\* 一般に、攻撃的な収容者と非攻撃的な収容者を分離して収容するのがよいとされている(Prison service, op. cit., p. 10)。弱者(vulnerable)の保護のために、弱者保護区(Vulnerable Unit)を設けている刑務所が増えているが、いじめの被害者は、出来る限り、通常の区画に収容するのが望ましいとされている。そうでなければ、加害者に誤解を与えるおそれがある



からである (Ibid., p. 16)。

午前と午後の会合は、様々な機能を果たし、それぞれが、順序を替えられるプログラムの中で独立したもの (self-contained) である。

## 二日目―五日目

毎朝の会合は特定の話題 (導入、薬物、アルコール、いじめ、保健) を取り扱う。それぞれが、収容者や職員、所内の秩序にとって重大な問題を提起する。これらの会合を指揮する職員は、その話題について訓練を受けており、彼らの関与が、作業の有効性の中核である。彼らは、導入プログラム全体を指揮するので、聞き手だけでなく教師でもある。

これら四つの自覚を促すテーマ (薬物、アルコール、いじめ、保健) は相互に関連しており、多くの点で、いじめは、他の関連する問題領域の供給と到達を管理するために用いられる態度であるので、問題を関連づけるものである。ゆすりやみかじめ料の要求は、収容者を脅して薬物や煙草を巻き上げるために、先に列举したような「いじめ」の形態をとる。<sup>\*</sup> 彼らは、これらの品物を帰休や面会から持ち帰り、また、収容者社会の支配的な者に贈り物をする。

\* 新人の収容者は、入所の時に現金を持っていないので、現金や物品を他の収容者から借りることが理由となって、いじめの被害者になるときがある。(Prison Service, op. cit., p. 9)

午後の会合は、導入面接やカウンセリング、刑の執行計画についての公的なガイドラインに従っている部分もある。午後の会合では、職員が、新人の青年のことをさらに学び、信頼関係を築く第一歩を踏み出し、弁護士との連絡や裁

判所への出頭、量刑について助言する機会が与えられる。それは、プロと素人の双方を援助し、助言を与えることができる矯正局の他の職員と連絡をとる時でもある。

すべての段階で、収容者は、自己の態度と現在の状況を検討するように要求される。逮捕、拘禁、裁判に至る事件の中で自己の役割を考えることが要求されるのである。統制されない怒りや暴力は破壊的であり、人間関係を解決するものではないということが説明される。怒りの制御や、対面での攻撃の統制、他人との交際技術の育成についてのコースは、葛藤の解決を目的としており、このような予防プログラムの人格変容 (person changing) アプローチの一部である。

・担当職員制 (personal officer scheme)

担当職員制は、刑務所職員の役割変更の一部であり、カーディフで発展した「いじめに対する刑務所全体の対応」は、この広範な役割を予防的プログラムの統合的要素とみなしている。職員は、収容者との相互作用において、従来よりも社会的、教育的、援助的 (supportive) な役割を有し、収容者の自己及び他者に対する理解に影響を与えるために行動する。これは、拘禁と規律という職員の機能がなくなったということではなく、以下のように、むしろ逆である。つまり、職員と収容者との関係は、信頼を築き、不安を減少させ、そして、最も重要なことであるが、収容者が自己の問題を語るのを抑えるのではなく、奨励するのである。非言語的徴表を読みとる訓練を受ければ、職員は、より深い、言葉で表現されない問題に気づくように警戒する。そして、雑談や所内の一般的な移動の間の何気ない会話は、自然なものであるので、重要であるが、他方で、行き当たりばったりの連絡は、問題を浮かび上がらせるほど長くあるいは深くならないという危険がある。非公式の会話は有益であるが、公式のインタビューや体系だったカウンセリングの代わりにはならない。後者は、収容者の態度と価値観を建設的な方向に変えるのに必要である。という

のは、自己および自己と他者との関係について、どう考えるのかが、その者の態度に影響を与えるからである。

もし、いじめを激減させたいのであれば、秘密という掟と密告しないという文化―若年の男子犯罪者に特有のものである―を否定しなければならない。これを達成するためには、収容者の信頼を勝ち取る以上の良策はない。刑務所という個人の特定性のない (impersonal) 雰囲気の中で、担当の職員が早期に接触すれば、新入の収容者には、どんな小さなものであっても、心配や不安について救いを求められる馴染みのある人間が与えられることになる。職員と収容者の間の信頼が向上すれば、さらにリラックスしたオープンな人間関係が生み出されることになる。職員と収容者がいじめを減少させるために協働することは重要な発展である。

・ 刑務所全体の対応の重要な要素

一 職員は、プログラムに関わり、立案と実行に参加しなければならない。

二 職員は、いじめが全ての刑務所で発生することと、そのような行動とその結果が重大であるということを認識しなければならない。

三 いじめが収容者に重大な結果をもたらすだけでなく、一般的に秩序と規律にとっても重大な害を及ぼすということを認識しなければならない。

四 職員は、いじめの構成要素とその様々な形態に精通していなければならない。

五 収容者は、完全に信頼において職員に連絡をとる必要がある。

六 刑務所全体のアプローチは有効であり得るし、実際に有効である。そして、すべての刑務所社会においていじめを減少させることができる。支援の雰囲気を作り出すことは、社会のすべての構成員に役立つ。

## 八 いじめ対策プログラム

### 目的

一 このプログラムは、加害者の反社会的行動に注意を喚起し、そのような行動を変容させることを目的としている。それは、被害者を保護のために隔離するよりも望ましい代替策である。後者の方法は、加害者の行動について、被害者を非難している。さらに、加害者の行動を変えることによって、被害者および他の収容者に言葉では表現できない利益がもたらされることもある。

二 懲罰として、プログラムは、加害者を通常の居室から待機室へ移動させる。<sup>\*</sup>そこで彼は、他の収容者から隔離され、自己の行動とそこから生じうる結果とを十分に認識させられる。

<sup>\*</sup> いじめの加害者に対する懲罰としては、刑の執行期間の延長、居室での監禁、便宜の剝奪、好ましい作業の剝奪、賃金支払の停止などが考えられる (Prison Service, op. cit., p. 17)

三 プログラムは、加害者に自己の反社会的行動を直視させ、その犯罪的行動を修正するための十分に開発された訓練単位 (module) のプログラムを与えるという点において、教育的な目的を備えている。

このプログラムの成功は、刑務所全体のプログラムの残りの部分が適切な雰囲気を生み出すのにふさわしいものであるかどうかにかかっている。

「プログラムは懲戒的であると同時に教育的である」

・ 一四日間のプログラム

加害者が通常の居室から特別に設計された居室に移動し、一四日間のいじめ対策プログラムを開始する前に、棟の

責任者 (the Wing Governor) によつて、「秩序と規律」(Good Order and Discipline GOAD) に付せられる。

通常の居室からいじめ対策房への加害者の移送は、高姿勢 (high profile) で実行されるし、公式の手続がとられる。このことは、全ての収容者に、いじめは容認されないし、発見されたときは厳格に対処されるということを示すために行われる。それによつて、また、刑務所の規律と職員の管理が強化される。

同様に、収容者が、隔離されていたことで同僚間の地位を上げようとする試みを排撃するために、通常の集団に戻る時も、公式の手続を踏むことになる。

#### 一日目

午前 収容者は、通常の居室から移動させられ、いじめ対策房の「家具のない」(unfurnished) (ベッドだけの) 居室に収容される。彼の個人的な所持品は留置される。

移動の理由が説明され、棟の規則に従わなければならないということが申し渡される。これらの規則に従い、訓練計画にふさわしい行動をとれば、彼の個人的な所持品は順次返却される。

午後 収容者が進んで順応することを示せば、トイレと水道、マットレスのついた近くの居室に移される。また、運動の時間を認められる。

#### 二日目

八：〇〇 解錠と申請 (applications)

八：三〇 居室で朝食

九：三〇 午前の点検

収容者が規則に従っていれば、得点が与えられる。合格点が得られれば、さらに所持品が返還される。

## 規則

収容者は、常に、自身と居室を清潔にしていなければならない。

週に二回シャワーを浴びなければならない。

指示と命令に常に従わなければならない。

点数制度 — 態度と行動に基づく

作業

清潔さ

職員に対する態度

プログラムへの参加

一〇：〇〇 要求されれば、職員の援助を得て、収容者は自己についての調査書 (performa) を完成する。

昼食

一二：三〇 居室の点検。その後運動。

一五：〇〇 完成された調査書から生じる、収容者とその態度についての詳細の徹底的なインタビューと討論。

いじめについての刑務所の立場といじめとは何かについての刑務所の見解が伝えられる。

収容者の犯罪的行動が問題にされる。

一六：一五 シャワー。その後食事。

三日目

二日目と同様のプログラムと日課が繰り返されるが、収容者のいじめの行動に取り組む一連の単位 (module) が含

まれる。たとえば、怒りの制御や自己表現 (self-presentation) の技術、対面での攻撃、他人との交際の技術 (personal skills)、自己評価の向上、いじめが被害者や自己および棟に与える影響などである。

#### 四日目から一四日目

列挙された単位の「順序の替えられる (rolling) プログラム」を備えた上述の日課が繰り返される。これらは、手続について訓練を受けた職員によって提示される。

#### 一〇日目

一〇日後に、個々の事例が、棟の責任者と主任刑務官、保護観察官、区画の職員によって検討される。この委員会は、加害者を通常の区画に戻すか、それとも、さらに訓練のためにいじめ対策プログラムを継続するかどうかを検討する。

加害者の態度と行動が引き続き職員に不安を与えるのであれば、いじめ対策区画での (処遇の) 延長が要求されることもある。<sup>\*</sup>

<sup>\*</sup> 加害者は、自己の態度と心構えが変わったことを職員に了解してもらえなければ、以前に収容されていた棟や区画に戻されるべきではない (Prison Service, op. cit., p. 19)。

「プログラムは懲罰的であると同時に教育的である。」

## 九 勸 告

一 全ての刑務所は、いじめを取り扱う刑務所全体のプログラムを実行すべきである。それには、職員や収容者、

保護観察官、教誨師、心理学者、医療スタッフ、訪問委員 (prison visitors) などの他のスタッフが含まなければならない。

二 全ての刑務所は、いじめを発見し、予防する訓練を職員が受けるようにしなければならない。このことは、訓練中の職員や専門コースの職員にも当てはまる。

三 全ての刑務所は、職員と他のスタッフが一連の手続 (set procedures) を熟知し、厳格に従うようにしなければならない。

四 全ての刑務所は、収容者が、共感をもって話を聞いてもらい、秘密を保持して事件が調査されるということを確実に知ったうえで、いじめのことを誰かに、できれば担当職員に、話すことを奨励しなければならない。

五 全ての刑務所は、いじめに巻き込まれた収容者を援助するために、適当な予算のある (properly resourced) カウンセリングと精神保健医療を備えなければならない。